

私が被爆体験を語るまで

金子廣子（当時5歳）
札幌市



原爆が落とされた時私は5歳でした。両親、それに4人の姉と兄がおりましたが、学校の朝礼中に熱線と爆風を浴びた姉（三女）は、身体の背面を被ばくしたというのに、仰向けに寝かせられていたそうで、8月18日に亡くなりました。まもなく私たちは父の郷里である秋田県の生保内に移住しましたが、父もじきに体調を崩して4年後に亡くなりました。

原爆投下時に18歳だった姉（長女）が広島出身の夫と紋別に引っ越してきたのをたよりに、私たち母子も北海道に移住しました。しかし、戦後の厳しい時期だったので、母が子連れで住み込みの仕事をするわけにもいかず、私は親戚などの家を転々としておりました。姉（四女）と兄は自活していましたが、私は小さかったので、足手まといになっているような気がしました。おかずを出されても素直に喜べなかったし、「あんたさえいなかったら」という何気ない母の愚痴が心に突き刺さるようでした。戦争も原爆もなかったら、私はこんな思いをしなくて済んだかもしれません。人には喋らずとも自分の運命を悔しく思いひねくれました。他の被爆者と横のつながりを持つとうという気もなく、姉（長女）や母の通う札幌の被爆者会館に行くこともありませんでした。

自分自身の被爆について考え始めたのは、姉（長女）が43歳で亡くなってからです。姉の右脚には大きな血の塊が袋のようにふくれあがっていました。私は産後の回復が遅く、人には言いづらい症状もあったため、医者に行きました。自分の症状と被爆体験との関係性を聞くと、医者はまるで被爆症状など一度も聞いたことがないかのように「それがどうしたの？」と一言。「北海道の人には被爆者のことなどわからない、わかる気もしないのか」と打ちのめされました。ただでさえそれまで隠して

きた被爆体験を胸の奥にしまい、さらに心を閉ざしました。出自を聞かれても秋田で育ったことだけを話すようになりました。

40代半ばから私は慢性甲状腺炎になりました。腰も悪く、骨ももろく、身体も動きにくいのです。今でも一日に何回も身体が急な緊張や発熱を覚え、月に何度かは疲れや倦怠感に襲われます。私のように被爆者手帳を持っている者でも、医療機関が十分に制度を理解していないために、支払い窓口などで手間取ることも多く、わざわざそこで主張をせずに諦めることもたびたびありました。頼れる医療機関は少ないので、他の被爆者から情報を得ています。願わくは国にはもっときちんと対応してほしいと思います。

私の名前「廣子」は広島からとって付けられたので、被爆や移住後の経験を経て「広島」そのものが忘れ難いトラウマとなりました。字を変えて「広子」という通名にしていたぐらい辛かったのです。

ヒロシマ・ナガサキから60年という節目に、北海道原爆訴訟の安井晃一さんから原告になるように誘われました。裁判所や国会にも出かけ、生まれてはじめて証言も行いました。東京の寒い春の日に、毛布で身体をくるみながら国会議員の皆さんに訴訟のピラを手渡ししたこともあります。受け取ってくれない方も多かったです。裁判も議員さんへのご挨拶も初めての貴重な経験でしたが、原告として名を連ねる以上には自分の経験について内側からは考えていなかったかもしれません。

2011年3月の東日本大震災と福島第一原発の事故がきっかけで、私は自分が被爆者であることを受け入れました。東北から北海道に逃げてきた沢山の子どもたちや、その子どもたちの甲状腺がんの話を聞いて、ずっと蓋をしてきた幼いころの自分を重ねあわせました。私は現在札幌のノーモア・ヒバクシャ会館を通じて、自分の被爆体験を語る語り部として小中学校などを訪ねています。

札幌市内の学校にも東北から移住した子どもたちがいるそうですが、とても他人事とは思えません。ある中学校で語り部の仕事を引き受けた

時に、直前に校長先生から「東北から転校した子たちに辛い体験を思い出させたら大変だから、放射能のことについては語らず戦争についてだけ語るように」と言われ、被爆体験を話そうとしていた私は頭が真っ白になりました。東北大震災は確かに辛い経験でしょうが、もしあの震災がなかったら、私は未だに被爆者として語ることを躊躇していたでしょう。

自分の経験を正直に語ることが大切だと信じています。目の前の人に自分の手術の傷を見せてでも、わかち合いをしていきたいと感じます。私の孫からも「ばあちゃん、僕の学校にも来て語り部をしてよ」と言われていますが、残念ながら、日本には被爆体験の語り部などに関心がない学校も多いのです。沢山の子どもたちと私の経験を分かち合い、伝えていきたいと思います。

